

祖父と孫―血のつながりが公演を実現 第二回法市農村舞台公演

車人形と箱廻しが共演

鈴木康浩

十月三日、吉野川を見下ろす三好町の香川県寄りの山あいにある法市(ほいち)で催した第二回法市農村舞台公演は、昨年十月二十二日の復活公演の十日前、同年十月十二日に仕掛けが始まった。

当日は兵庫県三原町で開かれていた人形サミットの最終日。同県姫路市の民族音楽研究会「こまの会」に所属する民族歌舞団「花こま」(藤尾千恵子代表)がサミットで公演する、その手伝いで三原町に来ていた同会所属の森崎芳樹さんが、会場でたまたま見かけた写真に森崎さんの母方の祖父、大久保進さんが写っていた。写真は法市復活公演の準備作業を撮ったもので、大久保さんは法市の代表として後に法市農村舞台保存会の会長になる。

「あーっ！これ、僕のおじいちゃんや！」森崎さんが驚いて叫んだ一言から第二回公演の構想がスタートした。「なに、なに、どうしたの？」―花こまのメンバーが次々と集まってきて写真に見入る。実はその説明中、同じ会場で、徳島の「阿波木偶箱廻しを復活する会」(辻本一英代表)が一人遣いの人形芝居「箱廻し」を公演していた。奇しくも、花こまと箱廻しは法市の第二回公演で共演することになる。一年がかりで構想を練った第二

回公演は人形芝居集団の再会も一年ぶりに実現した。人の縁、巡り合わせは実に不思議なものだ。神の手が撚った糸でつながっているのか。

祖父が復活公演を仕切ると聞いて、森崎さんは居ても立ってもいられず、母を連れ、復活公演にやってきた。昨年十月二十二日は平日だったが、前日に徹夜仕事をこなし、だるい体にむち打って。三原で会った徳島人が「次回は是非、花こまが来てほしい」としつこく声をかける。頭がぼーっとしたが、法市の人に「あー、大久保さんのお孫さん？ よう、来たねえ」などと温かく迎えられる、心がなごんだ。

「帰ってこいよ」と言いたい
舞台の復活公演について、我々は「イベントに終わらせてはいけない。やるのならずっと継続しよう」↓「そのためには地元の人々が喜ぶことが一番大事だ」↓「身内が帰ってくることを地元の人が一番喜ぶ」↓「子や孫は盆や正月にしか帰ってこないし、来ても地域のひとと全く交流しない」↓「復活公演で戻ってきて地元の人と交流できたらいいね」式の議論を続けてきた。

素晴らしい舞台のある地域ほど過疎化、高齢化が進み、夫婦暮らしはまだしも一

人暮らしの世帯も多い。よそ者の思いだけで突っ走ってはいけない。われわれは「地元の思いを一番大事にする」ことに細心の注意を払ってきた。復活公演の話を持ちかけても「担い手がない」「公演なんかより道路をつくってくれ」「などと断られることがよくあるが、無理に説得したりしない。身の丈以上に力を入れて取り組んでも長続きしないからだ。

全戸で保存会を結成

ところがどうだ。法市では全十六戸が保存会を結成。第二回公演の日も人が集まりやすいように日曜に設定した。花こまも森崎さんを通じて検討を始めた。一方の箱廻しを復活する会とは、徳島人が今年二月十一日、同会の山城町と池田町への門付けに同行させてもらったときに、辻本代表を法市に案内して快諾を得た。同会のメンバーは三好町在住の現役の箱廻し芸人に弟子入りし、技術と伝統を学んだ。師匠は引退したが、メンバーは門付け先の一部を受け継ぎ、門付けを続けている。三好町で人形を舞わすことは師匠への鎮魂と感謝の思いを込めることになる、と徳島人は考えた。

五月三十一日と八月二十八日には、プライベートとして花こまの事前視察が実現した。九月十一日は農村舞台の会メンバーの花岡憲司さんの好意で、花岡さんが所有する自宅裏、阿南市内原町榎ヶ谷の山に竹を刈りに行き、準備を着々と進めた。

三番叟の黄色い足袋で実りを祈願

いよいよ本番。十月三日(日)午後一時から始まり、大久保進・法市農村舞台保存会会長と西尾大生・三好町長が挨拶。阿波木偶箱廻しを復活する会が三

番叟を舞わず。箱廻しの三番叟は秋の実り―たわわに実った穂の色を象徴―を予祝する黄色い足袋を履き、稲苗を束ねる藁を踏んだ。観客は約三百人。会場から人があふれてしまうことを恐れ、あまり宣伝しなかったにもかかわらず、昨年の復活公演とほぼ同数入った。法市公演が地域の伝統芸能として根づいている様が見てとれた。

続いて、森崎芳樹さんが登場。今年、琉球民謡協会第二十二回民謡コンクール新人奨励賞を受賞した三線の腕前を披露する。舞台には大久保さんも上がってもらい、祖父と孫がみんなに顔見せした。今回の公演のへそになる演出だ。花こまは三番目に登場。八丈島太鼓と寿獅子、南京玉すだれ、車人形の説明から、車人形浄瑠璃芝居「新曲 さんしょう太夫―鳥おい歌の段」と順を追って盛り上がっていった。

第三回へ向けジャンプ

一年かけた公演が終わわり、徳島人は感謝と満足の気持ちでいっぱいだ。本当にたくさんの方がかわり、実現に力を尽くしてくれた。徳島人の師匠の森兼三郎氏は「農村舞台公演は一人でもやりたくないという人がでたら駄目。一回目より二回目、二回目より三回目が素晴らしい公演になるように力を尽くせ」とエールを送る。

十二月二十五日、法市は大算用で来年の第三回公演の実施を決めた。箱廻しを復活する会も来年正月は三好町で門付けをすることが決まった。一つ一つ積み重ねることで、地域に根差した芸能を深め、地域に生きる人々の誇りを一層高めてゆきたい。(終わり)

